

＜研究ノート＞

カナダ社会学の展開と現在

中 野 秀 一 郎

まえがき

カナダ社会学の歴史的展開を跡付けようとすれば、なによりもまず、それが生れ育ってきた社会（的土壤）について最少限度の認識をもつことが必要であろう。ここでは主としてその社会的・文化的特徴に留意しつつ、カナダ社会の歴史的背景について若干の事実を紹介しておきたい。

近代国家としてのカナダの誕生は明治維新の一年前、すなわち1867年に英領北アメリカ法（The British North America Act）に基づいて四つの英領植民地（ノバスコシア、ニューブラウンズウィック、アパーカナダ＝オンタリオ、ローアカナダ＝ケベック）が人口約350万の連邦を形成した時点に遡ることができる。その建国の由来に関連していえば、それより約100年前に＜革命＞によって独立を勝ち取ったアメリカ合衆国の潜在的脅威に対する英国植民地（政府）の守勢的態度に留意が必要である。実際、カナダはアメリカ革命当時多くの国王派（Loyalists）の移住者を受け入れたし、ケベックには「カトリック教会と領主制」を基礎にした封建制社会さえもが存在していたので、南北戦争で勝利した＜南の大きな兄弟＞がその革命（共和制）の旗印を掲げて北上することに大きな懸念を抱いてもいたわけである。その後、マニトバ、ブリティッシュ・コロンビア、プリンスエドワード島が連邦に加入し、1905年にアルバータとサスカッチワンが加って大西洋から太平洋にまたがる現在のカナダが完成する。

いうまでもなく、17世紀初頭フランスによって開発されたケベック（ヌーベルフランス）は、1763年のパリ条約によって英領となった後もフランスの伝統を守り続けたのであり、従って、現在でもここには独自の知的風土が残存している。他

方、英領カナダにしても、国王派の流入に加えて、その後に移り住んだスコットランド人（カトリックとプレスビタリアン）、ドイツ人（ルター派）などは、総じて、共和制のアメリカを忌み嫌い、「階統と秩序」のある社会を構築しようとする意欲においてきわめて保守的なイデオロギーを擁していたのである。

こうした社会・文化的状況の故に、単一の＜カナダ社会学＞を語ることはほとんど不可能なことであり、従って、ここでフランス系カナダ社会学とアングロ系カナダ社会学をまず別々の系譜としてその歴史的展開を考察し、その後（多分、いまだ一つの可能性の域を出ないと思われるが）この＜二つの＞社会学の関係（交流）の問題にも触れてみたいと思う。

カナダ社会学前史

1) フランス系の場合

フランス系カナダ社会は、宗教（カトリック）を中心にしたきわめて同質性の高い民族共同体として一つの伝統を形成してきた。そして、その価値世界の指導者として君臨してきたのが僧侶階級である。カトリシズムの伝統は、社会哲学と社会学的研究を早くから区別していたプロテスタンティズムの場合とは異なり、中世以来「聖と俗」とを包摂する全体論的（一元論的）なイデオロギーを護持していたので、宗教的価値を共同体成員の日常生活全体に浸透・貫徹させようとする一般的傾向をもっていた。従って、社会学もまた一つの社会哲学としてこの宗教の従僕でなければならぬと考えられたのである。

1930年代に入って、科学的社会学が高等教育の中へ導入されたとき、当然のことながらこの実証主義的 sociology に対する反撥が起った。カトリック

にとって、社会学のくみするイデオロギーは、<宗教が客観的現実に土台をもたず、神もまた人間や社会の象徴でしかない>と主張するものであったからである。そこでかれらは、<正しいキリスト教の教義>に立脚した社会学を提唱することになる。

しかし、例外がなかったわけでない。この「教会と領主制」が君臨したフランス系カナダ社会の社会構造、家族、教区や土地利用などを地道に、実証的に分析し続けた Léon Gérin (1863-1951) がそれであり、かれこそがフランス系カナダ社会学の前史を飾る巨人であるといわれているのである。

Gérin は1885年パリに留学、Leplay の弟子達 (Tourville や Demolins) のもとで勉強し、参加観察とモノグラフの手法を身につけて帰国した。もっとも、かれの最初の留学の意図はケベックの農業に役立てるために植物学と生物学を勉強することであったという (*La Sociologie au Québec*, 1975: 138-139)。Gérin の経験社会学は、しかしながら、組織化や制度化という点では実を結ばず、思想界には教会のイデオロギー(ケベック・ナショナリズムやフランス語の擁護、信仰問題など)が支配し続けるのである。

20世紀に入っても状況は遅々として進展し難くみえたが、高等教育における諸科学(化学、医学、法学など)の制度化に伴ない、社会科学、人間科学の必要に対する認識も生れ始める。こうした一般的傾向に拍車を掛けたのが1923年の「フランス系カナダ科学振興協会」(*L'Association canadienne-française pour l'avancement des sciences = ACFAS*)の創設であった。しかし、人間と社会に関する科学は制度的には1920-30年代にその形を整えるものの(モントリオール大学の社会・経済・政治科学部、1920年。ラバル大学の社会科学部、1932年)、未だ教会的イデオロギーの勢力を払拭することができず、本格的な社会学の展開には、さらに20年余の年月を必要としたのである。

従って、Georges-Henri Lévesque がラバル大学社会科学部を創設した当時(かれ自身が初代部長)、全体的傾向は未だカトリック主導型ではあったが、一つにはかれの弟子が第二次大戦のためフランスのカトリック系大学院に進学できず、アメ

リカ東海岸(シカゴ、ハーバード、コロンビア、コーネルなど)で勉強したこと(後に、かれらはその成果を携えて帰国する)、二つには Lévesque 自身が社会科学と社会哲学の明確な分離に基づく両者の新しい相補関係を主張したことによって、実証主義的・科学的社会学の基礎作りが伸展したのである。もっとも、かれ自身はこのため大変な批判にさらされ、カトリック系大学(ラバル大学)での教授資格を問われるという有様であった。

けれども、Gérin (とその仲間達)の実証的な仕事が蓄積されていったし、1943年にはモントリオール大学社会科学部に「社会学研究所」(*L'Institut de sociologie*)が創設され、文献整備が行なわれ始める。Lévesque が Everett-C. Hughes を客員教授として招いたのはこの頃(1942-1943年秋-冬学期)であった。シカゴ大学のこの実証主義者は、自ら人種問題を研究する一方で、学生達には社会学方法論を講じ、実証調査の手引き書 (*un programme de recherches sociales pour le Québec*)を残すことで、フランス系カナダ社会学の発展に重要な影響を与えたのである。

2) アングロ系の場合

フランス系カナダ社会学の前史が哲学や神学からの離脱の努力、あるいはまたケベック社会の伝統的共同体の諸問題との関連をその特徴とするのに対して、アングロ系カナダ社会学の前史は、経済学や社会史の影響を強く受けるものであったが、自らの社会の実証的研究という点ではフランス系社会学の場合と同様の展開をみせた。ただ、言語の点から隣国アメリカの学者や教育機関にその発展の多くを負っていることは否定し難いところである。

社会学の最初のコースは、1908年、ノバスコシアのアカデア大学で J-F. Tufts が開講し、その後マニトバ大学やウィニペグ大学でもコースが開かれたが、C. A. Dowson が1922年にマクギル大学にカナダ最初の社会学・社会福祉学部を創設するまでは、その活動は散発的でしかなかった。Dowson はシカゴ学派の伝統に乗っとり実地調査を強調したが、同時にバプティストの牧師でもあったかれは、北アメリカ社会の批判者としても良く知られており、そうした調査もまた社会福祉事業を通して社会の改良に役立てられるべきもの

でもあった。かれを引き継いで、ここでも重要な影響を残したのは E-C. Hughes (1927年) であり、かれは周知の通り、フランス系カナダ社会の構造変動、フランス系とアングロ系の諸制度の関連、工業化・都市化の分析などで古典的な業績をあげたのである。

他方、トロント大学では C. W. M. Hart が人類学部で最初の社会学の講義を開講するが、ここには R. M. MacIver が政治経済学の教授として1915年以来その影響を与え続けていた。独立の社会学部が形成されるのは1963年であるが、その重要な指導者は H. A. Innis であり、かれ独自の社会史の手法はトロント大学の社会学に一つの個性を与えるものであった。Innis 自身は、マクスター大学とシカゴ大学で教育を受け、1920年にトロント大学の政治経済学部に着任するが（そして、結局一生ここに留まることになる）、1930年に出版された *The Fur Trade in Canada* でいわゆる〈Staple Theory〉の仮説を打ち出してその名を馳せる。カナダ政治学会 (Canadian Political Science Association) やアメリカ経済史学会 (American Economic History Association) の創設はかれの努力に負う所が大きい。F. W. Underhill たちの The League for Social Reconstruction に反対して、学問の政治からの分離 (detachment) の伝統を築いた点でも注目に値しよう。戦後になると、カナダとヨーロッパ文明との関係に対する関心からかれの研究主題が〈コミュニケーション〉に移行し、その系譜から Marshall McLuhan を生み出したことは広く知られているところである。若干つけ加えれば、第二次大戦後トロント大学へパーソンズ社会学 (体系-機能主義) が流入するについては、戦前の Parsons 自身や R. K. Merton の訪問に加えて、さらに戦後 Dennis Wrong, Ely Chinoy, S. M. Lipset らがハーバード大学やコロンビア大学からやってきたことが大きな契機になっていよう。もちろん、こうしたアメリカ社会学の影響は別のアングロ系大学でも散見され、例えば、Parsons の直弟子のひとり Kasper Naegle はブリティッシュコロンビア大学へ、またハーバード大学の卒業生 John Dally がマニトバ大学へ、この頃それぞれ着任しているのである。

カナダ社会学の展開

1) フランス系の場合

1950-60年代にかけて、科学的社会学の確立過程が着実に進行する。ラバル大学では、ハーバード大学で T. Parsons の薫陶を受けた Guy Rocher が1952年に着任し、〈構造-機能主義〉による方法論や理論を移植するが、かれは同時に Freud の精神分析、C. Kluckhohn の人類学などの影響をも受けて帰るのである。もちろん、Rocher 以前に、ここには1945年以来社会学の教授であった Jean-Charles Falardeau がいて、かれらがいわゆる〈第二世代〉を形成することになる。Falardeau もまた E-C. Hughes にひかれてシカゴに留学するが、その間 Redfield, Wirth, Burgess らの方法論を身につける。さらに、1955年には、カーネギー財団の援助で教授陣の補充が可能となり、Fernand Dumont (1955年)、Yves Martin と Marc-Adéland Tremblay (1956年)、Gerald Fortin (1957年) らが次々に就任する。〈間違っただけで社会学者になった〉という哲学者肌の Dumont は Weber や Aron の線に沿って〈歴史意識〉という問題を引っさげてパリから帰ってくるのであり、その後も社会学の認識論に固執する。Tremblay は1950年にコーネル大学の社会学-人類学部大学院に進学し、1956年10月までそこに滞在するという経験をもっている。かれの場合は、文化人類学への志向が〈精神病の原因論〉というノバスコシアでの実証研究によって触発されている点がユニークである。こうした多様な人材を得て、ラバル大学の社会学は、教会勢力から自由な、厳密に科学的な方法による研究体制を確立し、社会形態学、職業、政治行動、宗教、社会階層などの実証的研究を通して飛躍的な展開をみせるに至るのである。

この時期、教授陣の補充と平行して、フランスから多くの著名な社会学者が招かれ、その影響を残していったこともつけ加えておかなければならない。すなわち、Raymond Aron, Georges Balandier, Jean Stoetzel, Maurice Duverger, Georges Gurvitch たちがそれである。かれらの学風や業績はよく知られているので、その影響については

ここで喋々する必要はあるまい。

他方、研究活動も進展した。カーネギー財団の援助のもとに、Guy Rocher の「世代間職業移動」、Gérald Fortin と Marc-Adéland Tremblay の「林業労働者」、「農村地帯での職業活動」、「ケベックにおけるサラリーマンの生活条件」、Yves Martin の「ケベック市の都市社会学」、Fernand Dumont の「宗教集団」などの研究が、実証的に遂行されたのである。

こうした研究成果の発表の場として、1960年には学術誌 *Recherches sociographiques* が創刊され今日に至っている。その目的が、基本的にはくわれわれ自身の社会の研究に発表の機会を与える、というものであることから分かるように、この時期の社会学は（そして、この伝統は今日に至るも変わらないと思われるが）ケベック社会の現実に第一義的な関心を示していた。特に、F. Dumont が1962年、「フランス系カナダ社会における研究の現状」というタイトルの *Recherches sociographiques* 主催の第一回シンポジウムで提示した三つの主要な社会学の研究主題、すなわちイデオロギーと史誌、教育システム、権力と社会階級はその後も引き続き受け継がれてゆくのである。

他方、フランス系社会学のもう一つの中心であったモンリオール大学に目を転じてみると、1955年に社会学部が独立し、やはりシカゴ大学で勉強してきた Norbert Lacoste 神父が初代の学部長を務めるが、Hubert Guidon, Philippe Garigue らが教授陣を形成する。そして、Garigue が1957年に社会科学部長 (doyen de la Faculté des sciences sociales) に就任以後、きわめて活発な研究活動が軌道に乗るのである。1959年4月、Lacoste によってラバルの社会学者たちがモンリオールに招かれて、両大学の交流、すなわちフランス系社会学という統一体も日の目をみることになる。

いうまでもなく、モンリオールの社会的環境はケベックと比べるとより都市的であり、かつフランス系とアングロ系の人口が混在する地域であったから、社会学の研究もこの事実を反映している。ちなみに、Lacoste の最初の研究は *Les caractéristiques sociales de la population du grand Montréal* (Université de Montréal, 1985) であった。

実証研究の分野でも、Raymond Breton のリーダーシップの下で、1959年には移民の現状、1960年には投票行動に関して、それぞれ大規模な調査が実施された。マクロ社会学では、Marcel Rioux と Philippe Garigue が、フランス系社会の変動と近代化、なかんずく村落社会における家族の変動や親族構造の変化を研究したが、Garigue の1958年の著作 *Études sur le Canada français* (Montréal : Faculté des sciences Sociales, économiques et politiques) はその成果である。社会心理学的なアプローチによる Robert Sévigny の宗教 (的経験) の研究もこれにつけ加えておく必要がある。

さて、1960年代に入ると、いわゆる「静かなる革命」(La révolution tranquille) が進行し、ケベック社会の近代化が急激に展開することになるが、そうした状況の中で社会学者の実践活動もいきおい活発になる。ラバル大学の社会科学部はそうした活動への人材供給機関としても重要な役割を演じるが、なかんずく日刊紙 *Le Devoir* や雑誌 *Cité Libre* (1950年に Gérard Pelletien, Pierre E. Trudeau, それに Jacques Hébert によって創刊) を中心に社会学者の「進歩的な」イデオロギーが広く流布するところとなるのである。また、組織化の点でいえば、1961年年秋 ACFAS の第29回大会で、社会学者は人類学者、社会心理学者と共に「L'Association canadienne des anthropologues, psychologues sociaux et sociologues de la langue française」を独立の学会として創設したが、これはフランス系社会学の地位確立にとって決定的な契機となった。留意すべきは、こうした活動を支えた財政的援助が、カーネギー財団とロックフェラー財団から寄せられている点である。

1960年代の組織立った活動では、ラバル大学を中心にした学術誌 *Recherches Sociographiques* が、1962年のそれに引き続いて、1964年には「フランス系カナダの文学と社会」、1966年には「フランス系カナダ社会における権力」、そして1968年には「フランス系カナダ社会における都市化」という各テーマでシンポジウムを組織したことである。また、1964年秋には、Association internationale des sociologues de la langue française の大会が、「現代世界における社会階級」というテーマを掲げてケベックで開催されるが、その記録は

Cahiers internationaux de sociologie に2回に亘って掲載された (Vol. XXXVIII, XXXIX, 1965)。

他方、モントリオール大学でも1969年5月に学術誌 *Sociologie et Société* が創刊された。1960-70年代におけるフランス系社会学の主要な研究領域を J. C. Falardeau は次の11項にまとめている。すなわち、(1)地域—都市社会学、(2)社会構造 (社会階級、社会運動—労働運動を含む—) の社会学、(3)労働の社会学、(4)教育の社会学、(5)青少年研究、(6)医療と健康の社会学、(7)政治社会学及び権力の研究、(8)イデオロギー、(9)文化の社会学 (文学を含む)、(10)ケベック社会の全体的研究、それに(11)方法と理論に関する研究がそれである。

2) アングロ系の場合

フランス系社会学の場合と同様、ここでも社会学の展開はカナダ社会の現実に対する強い関心と、それに1960年代のアメリカ社会学の影響 (これは言語の関係から、フランス系社会学の場合よりも一層直接的であったと思われる) に対して生起する一種のナショナルイズムが特徴的である。もちろん、経済史、社会史、史誌 (Historiography) の伝統は歴史社会学 (Historical Sociology) としてアングロ系社会学の性格の一面を形成した。そうした意味での典型的なアングロ系カナダ社会学者として S. D. Clark がいる。かれは、いわば1960年代を牛耳ったアメリカ型社会学 (構造—機能主義) の本流に抗してカナダの社会学の伝統に生きた人物である。

Clark は、Innis の伝統を引き継いでトロント大学の社会学部 (1963年に政治経済学部から独立) の部長となるが、かれの学問向上の基本的立場は一種の「経済史観」によって貫かれていた。もちろん、Clark はマクギル大学で Carl Dawson や E-C. Hughes (1933-35年) の薫陶を受けているので、シカゴ学派の影響、特に R. Park の都市生態学や W. I. Thomas と Znaniecki の解体—再組織化理論の影響を受けてはいた。そして、1960年代にはかれの仕事 (現代都市住民の研究) もアメリカ型の調査技法に依存するようになる。

この点は、Harrison によれば、社会学には相両立しえない二つのアプローチがあるという。一つは、歴史的・比較学的、そして分析的には集合主義的なアプローチ、もう一つは非歴史的で分析

的には要素主義的なアプローチである。いうまでもなく、カナダ社会学の伝統は前者であるが、1950-1960年代に後者のタイプであるアメリカ社会学の影響が強くこの国を支配するようになる。従って、Clark のような社会学歴の長い学者の場合、その時々の研究状況によって学風の一貫性が崩れるということもあるるのであり、彼女の判定によれば Clark の1940年代の仕事、*The Social Development of Canada* (University of Toronto press, 1942) や *Church and Sect in Canada* (University of Toronto press, 1948) などは前者のアプローチに属するが、後期の都市貧困層の研究などは後者のアメリカ型社会学の産物であるという (Harrison, D. 1981)。

もっとも、Clark 自身によれば、1950年代になってアングロ系社会学の展開に決定的なモメンタムを与えたのは、かれのいたトロント大学ではなく、むしろモントリオールのマクギル大学であったという。未だカトリズムが諸学問の発展を方向づけていたトロント大学と異なり、マクギル大学ではより実証的な社会学の訓練を受けた卒業生が主としてハーバード大学やコロンビア大学で博士号を得てカナダ各地の大学で社会学を講ずるようになる。1960年代初頭、カナダで独立の社会学部をもっていたのはマクギル大学だけで、社会学はたいていの場合、経済学や人類学と同居していたというのが現状ではあった。もちろん、1960年代後半はアメリカからの社会学者の流入が相次ぎ、カナダ社会学の調査活動を刺激し、大学院教育の体制が強化されるが、他方こうした学者がカナダ社会の現実に無知で、時にはかれら自身で閉鎖的な世界に引き込もるといったネガティブな側面も無視できなかった。

もう一つは、1960-70年代においてカナダ社会学を捉えたネオマルクス主義とナショナルイズムの問題がある。この時期、特にカナダ社会学がこうしたイデオロギーにとりつかれた理由はいくつか考えられる。一般的には、<巨大な南の兄弟アメリカ>は、FDR のニューディール体制以来ケネディに至るまで、カナダ知識人にとっては一応民主主義のモデルとして映っていたのだが、1960年代にはこのイメージが崩壊したことに加えて、きわめて直接的な形で (経済領域はもちろん、社会

学の急激なアメリカ化を含めて) アメリカの存在がカナダの国家としてのアイデンティティを危くするという危機感を煽ったのである。ネオマルクス主義は、概して、中心—周辺理論にみられるように、少数者(弱者)の多数者(強者)に対する生存権主張の理論として、小は各地の民族問題(ケベックはまさにこうした状況の渦中において、公式通りネオマルクス主義とナショナリズムにとりつかれたとってよい)から大は世界規模の南北問題に至る諸現象に恰好の説明図式を与えることになった。従って、アメリカのベトナム戦争への全面介入やカナダ経済へのアメリカ経済の浸透が時宜を得てカナダ・ナショナリズムを触発し、それが社会学へももろに反映したというわけである。A. K. Davis は、かれ自身 T. Parsons のもとで Thorstein Veblen を勉強した経歴をもっている位だけれども、昨今のアングロ系カナダ社会学の現状を分析した1970年の論文(Arthur K. Davis, "Some Failings of Anglophone Academic Sociology in Canada", in Jan J. Loubsen, ed., 1970: 31-35)の中で、アングロ系カナダ社会学の不毛性は、一つにはそれがアメリカから移入した構造—機能主義に汚染されているからであり、一つには中産階級の社会学者が支配勢力(ブルジョワ)と自己同一化していることにあるとして、闘争理論や弁証法理論の復活を強く訴えているのである。

S. M. Lipset がしきりに強調するように、カナダにはアメリカには育たなかった社会主義運動が存在した。平原洲の農民運動や CCF (Cooperative Commonwealth Federation) はその典型である。Clark 自身もまたアルバータ洲の農村に生れ育っている。そのかれが、*Church and Sect in Canada* の中で教会を「帝国主義的拡張の道具」とみなし、それが地方自治的民主主義の発展に障害になっていると分析したとしても不思議ではない。もっとも、そのかれも1960—1970年代には、トロント大学という Academic Establishment の中において、カナダの「進歩的 sociology」の伝統から若干遊離した感も禁じえない。

Innis, Clark の伝統を引く「トロント学派」(の歴史社会学)は、しかしながら、1970年代に入るとアングロ系カナダ社会学全体の中で大きな展開をみせる。そしてその嚮導原理となるのはマルク

ス主義である。「ボックス・アメリカーナ」の崩壊とアメリカの強大な影響に対する反撥としてのカナダ・ナショナリズムがその基盤であることはすでに触れたが、さらに加えてカナダ国内における地域主義の興隆がこれに重なっている。すなわち、「ケベック的状况」が他の地域でも存在するようになったのである。1979年の *Canadian Journal of Sociology* 4 卷3号の特集「アングロ系歴史社会学の新しい方向」によせた編者 Robert J. Brym の説明によれば、自然資源に恵まれたアルバータやニューファウンドランドにおける分離運動に象徴されるように(そして、もちろんケベックはその大先輩である)「カナダ」という国家的アイデンティティが未成熟のまま、今度は地域意識が強烈に展開するようになり、それと共に地域の歴史的発展に対する興味と関心が盛り上がったのだという。従って、かれの判定によれば、アングロ系歴史社会学はもはや大文字の「トロント学派」による一元的支配として理解することはできないのであり、各地域を基盤とした新しい歴史社会学が発展しつつあるというのである。

アングロ系社会学を象徴するもうひとりのヒーローは John Porter である。オタワという政治的中心に陣取ったために(カールトン大学)、晩年はいっそう「保守化」したとみなされはしたものの、1965年に出世作 *The Vertical Mosaic: An Analysis of Social Class and Power in Canada* (University of Toronto press, 1965) によってアングロ系カナダ社会学界に不滅の名声を残すことになった。J. Porter は英国から移住した移民の子として1921年バンクーバーで生れたが、両親の帰国と共に英国に帰り、その後第2次大戦時に志願し従軍、大尉で復員して1946年に LSE に入学するが、ここで「革命なき社会主義」という思想的伝統を身につける。常に社会構造的な不平等に関心をもち続けた Porter は、きわめてマクロ社会学的な観点から、カナダ社会のエリート、高等教育、職業選択などの問題に精力的に取り組んだ。もちろん、所得の不平等配分、地域格差、人種の成層構造などの研究は、かれが最初の論文 "Elite Groups: A Scheme for the Study of Power in Canada" [*CJEPS* (Canadian Journal of Economics and Political Science) 21 (4): 498—512] を世

に問うた1955年当時には、未だ学会でも本格的には取りあげられていなかった。1949年にカールトン大学に奉職し、結局、ここに一生留まったが、その最後の論文集 *The Measure of Canadian Society: Education, Equality and Opportunity* (Ontario: Sage Educational Publishing) はかれの亡くなった年(1979年)に出版されている。その内容は、それぞれカナダにおける社会移動、人種の多元主義、権力と自由、社会的性格、教育と平等、連邦主義、脱工業化社会の高等教育などを扱っており、もっとも古い論文は1961年に書かれているが、それらはいずれもカナダ社会に関する今日の主要な争点を扱っているといつてよい。その基本的思想は、自由主義的社会主義(Liberal-socialist)であつて、やや強めの政治権力が能率のよい官僚制を武器に国民の基本的自由と福祉を増進するための条件を整備してゆくという発想である。確かに、こうした考え方は「オタワ志向」的であつて、東海岸や平原洲の窮状に目をつぶるものだ、という批判もある。しかし、最近の C. Cambell と G. Szblowski の著作、*The Superbureaucrats* (1977年) が証明しているように、例えば、今日カナダ社会におけるエリートの補充は他の産業化した社会に比べてきわめて民主的で開かれている、というような事実も存在するのである。カナダ社会の現状分析ということになれば、それこそイデオロギー的なバイアスを排することは実に難しいであろうが、それがまた社会学の成否を問う試金石でもあることは間違いなからう。

さて、最後に、1960年代のアメリカ社会学の席卷に対して、1970年代には社会学の「カナダ化」(Canadianization) という現象が生起するが、カナダ社会学の性格を今一度特定することも含めて、この運動(The Canadian Sociology Movement) について紹介しておきたい。

1970年、CSAA (Canadian Sociology and Anthropology Association) の年次大会が「カナダにおける社会学の将来」という特別のセッションを開いたが、これを契機に社会学者及び人類学者の間で「カナダ化」の問題が大きな争点となった。1975年のエドモントンでの年次大会では、「現在非カナダ人の教授が50%以上を占めている学部では助教授以上のポストに外国人を採用すること

を当分停止する(モラトリウム)」という進言を可決した程である。実際1960年代の社会学部の発展で社会学教授陣の伸びは年間33%にもものぼったが、その多くは外国(主としてアメリカ)から供給された。従つて、1970-71年度にはカナダの社会学者と人類学者のうちカナダ人の割合が半分を切つて僅かに40.3%、これに対してアメリカ人の割合は38.5%にも達していたのである。他方、社会学の内容に関しても同様に「カナダ化」の問題が問われ始めていた。その一般的傾向は、既成のアメリカ社会学に対する「左からの攻撃」であつたが、これは間接的にはあれ A. Gouldner らのアメリカ社会学批判(1968年度アメリカ社会学会年次大会、於ボストン)が影響してもいたわけである。1975年に *The Canadian Journal of Sociology* が創刊されたのも「カナダ社会の研究に基づくカナダ社会学の確立」という目的と密接に結びついていた。「帝国主義」の中心たるアメリカではなく、いわば「周辺部」のカナダで独自の新しい「社会学的展望」(パースペクティブ)の構築が可能ならずであるという認識である。そして、その視角の一つは、いうまでもなく、カナダ社会学の伝統であるマクロ歴史社会学であり、ネオマルクス主義との深い親和性であつた。この点はまた、アングロ系社会学がフランス系社会学から学ばべきだとした事柄でもある。こうして、カナダ社会学は、自らの社会の「統合と存続」の危機を鋭く映し出す問題意識に支えられた実証研究と新しい視角の構築に指向することになる。その基本的特性を Harry H. Hiller は五点にわたつて論じている(Hiller, H. 1979: 139-145)。それを簡単に紹介してこの項を閉じることにしたい。

まず第一は、カナダ社会学の連続性(continuity)ということである。すでにみたように、制度化の点よりみればカナダ社会学の成立はせいぜい1950年代、1960年代以降のことではあるが、しかしながら、近代社会学が、Weber, Durkheim, Comte, Marx らの前史によって支えられていると同様、カナダ社会学もまた H. A. Innis, Léon Gerin, Jean Faladeau, C. A. Dawson, S. D. Clark らの伝統の内にその思想形成の中核をみる事ができるというわけである。そこには、歴史性の視角(政治経済学)のみならず、体制的な学

問の専門化に対する批判の視点が存在するからである。

第二に、アメリカ社会学をより創造的に（カナダ社会の現実に合せて）理論化する可能性である。この点に関しては、アメリカ型の進歩的・自由主義的なイデオロギーを超えて、独自の「批判社会学」（マルクス主義を含めて）の構築が進められているという。

第三に、マクロ社会学的なパースペクティブ、特にカナダ社会を全体として把握するという視点である。これはすでに述べた＜伝統＞の連続性に見られる歴史社会学のパースペクティブでもあったわけだけども、この方向の努力が今なお試みられているのである。

第四に、カナダ社会の研究とそれに基づく社会学の理論を＜普遍化＞するという課題である。すなわち、カナダ社会学の社会学一般への貢献の問題がそれである。もっとも、これについては未だ具体的な内容は示されていない。

第五に、科学としての社会学の性質と役割に関する哲学的な問題がある。かつて、イギリスの知的伝統がカナダにおける社会学の発展を阻害してきたきらいがあるが、それが1960年代になって突然セキを切ったように発展したのはいかなるイデオロギーの変化によるのであろうか。確かに、伝統的な人間学に代って一種の技術科学（Technocratic model）として社会学が導入されたことは疑いを入れない。しかし、社会学の＜性質＞に関するこうした基本的な議論も今日カナダ社会学との関わりで充分議論されているとは思えない。

こうしてみると、カナダにおける社会学の＜カナダ化＞は今なおその途上にあるといつてよい。従って、カナダ社会の現実に根ざしながら、かつ国際的に通用するようなカナダ社会学の＜パースペクティブ＞が形成されるのには、なお、かなりの時間が必要かと思われるのである。

結びにかえて

国家としてもそうであるように、カナダ社会学もまたアメリカ（社会学）の存在と影響に脅かされながら、カナダ的アイデンティティを求め続け

てきたといつてよいであろう。そのことはまた、社会学の研究と実践がこの社会の発展と密接に結びついていたことによっても補強されたが、他方で、カナダ社会学の国際性、普遍性に関する問題を提起することにもなった。

しかし、一般論としていえば、社会的現実との密接で積極的な結びつきは、カナダ社会学の重要な特質の一つであることは否定すべくもない。特に、1960年代の急激な変動期（近代化過程）には社会学者の研究とその成果に基づく政策的提言が政治のサイドから積極的に求められたこともあって、この傾向は大いに助長された。そのイデオロギー的基礎は、例えば、Guy Rocher が1970年のカナダ社会学—人類学会の年次大会へ提出したペーパー“The Future of Sociology in Canada”に明らかである。かれは、社会学を＜状況の中の科学＞（a science-in-situation）と性格づけ、それが具体的歴史的状況の中でその核心たる「価値の世界」を直接研究する学問でありながら、同時に自らの価値を常に問われる立場にあるため、歴史と断絶したり、政策の形成や検討の問題から身を引くことは不可能であると断じるのである。

こうして、1960年代には、例えば、The Commission on Bilingualism and Biculturalism に研究者や助言者として多くの社会学者が動員されたし、その後も女性、環境、家族、障害児、医療、先住民（文化）、マイノリティ、言語政策などあらゆる領域で社会学者の積極的な発言や行動が観察されるのである。そして、こうした傾向は、自ら二重のアイデンティティ・クライシス（カナダ人として、そしてケベック人として）をもっているフランス系社会学の場合により強いと思われる。

社会学の制度化という観点から標準的なテキストの出現ということに注目してみると、アングロ系社会学ではシカゴ大学の博士号をもちマクギル大学の社会学部の開祖（1923年）でもある C. A. Dawson が *An Introduction to Sociology* (NY: The Ronald Press Co.) を刊行したのが1929年と早いものに対して、フランス系社会学では Guy Rocher の *Introduction à la sociologie generale*, 3 tomes は1968—69年に刊行されている。ちなみに、Rocher の入門書は三部15章という構成で、その各章の主

題は以下の通りである。

第一部 社会的行為

- 第1章 社会的行為
- 第2章 社会的行為の規範的基礎
- 第3章 社会的行為の観念的・象徴的基礎
- 第4章 文化、文明、イデオロギー
- 第5章 社会化、同調、逸脱

第二部 社会組織

- 第6章 社会組織：分類と類型
- 第7章 伝統的社会と技術的社会
- 第8章 社会組織：機能、構造、システム
- 第9章 社会システム

第三部 歴史的行為

- 第10章 歴史性的社会学の諸問題
- 第11章 社会変動の要因と条件
- 第12章 社会変動の担い手
- 第13章 工業化、発展、近代化
- 第14章 植民地システムと脱植民地化
- 第15章 革命的過程

その学問的背景を考えてみる一つの手掛りとして引用を検討してみると、10回以上の引用がある学者のリストは次の通りであった。

E. Durkheim	41回
K. Marx	32回
T. Parsons	26回
M. Weber	25回
A. Comte	24回
H. Spencer	20回
G. Gurvitch	15回
F. Engels, C. Levi-Strauss	12回
G. Balandier, S. M. Lipset	10回

また、*Recherches Sociographiques* (フランス系社会学) と *The Canadian Review of Sociology and Anthropology* の引用を比較したデータ(表1)では、

表1

引用された作品 又は論文	RS(1960-1970)	CRSA(1965-1970)
カナダ人	46.0	10.0
ヨーロッパ人	18.8	8.0
アメリカ人	33.5	80.0
その他	1.7	1.5
計	100(434)	100(990)

(*La Sociologie au Québec*, 1975 : 19)

フランス系社会学者の自己準拠の高さに比べて、アングロ系ではアメリカ社会学の影響がこの時期圧倒的であることが分かる。(ちなみに、CRSAの分析では外国人とフランス語で書かれたケベック人の論文は除いて計算してある。)CRSAで、アメリカ社会学者の被引用回数をみると、第1位がT. Parsonsで28回、次いでR. K. Merton 20回、A. Strauss 16回、S. M. Lipset 15回、そしてE. Goffman 10回の順となっていて、この結果は、D. M. ConnorとJ. E. Curtisの仮説、すなわちアングロ系ではフランス系と比べて社会心理学的な関心がより高いという命題を証明することになっている(*La Sociologie au Québec*, 1975 : 190)。

最後に、<二つの社会学>の関係について触れておこう。1970年のG. Rocherの分析では、<ほとんど完全に分離した二つの社会学が相互に無知のままで併存している状態>である、という(*La Sociologie au Québec*, 1975 : 25)。カナダ社会学一人類学会における勢力関係では圧倒的にアングロ系優勢の体制であって、これは学会誌の構成にも反映されている。もっとも、このことはカナダに二つの異った社会学(学派)が存在するというのではなく、むしろカナダ社会の言語的二重文化性がカナダ社会学にも存在するというに過ぎない。そこで、Rocherは次のような提案を披瀝するのである。——カナダの社会学者は分離主義(Separatism)を乗り越えて、相互に相手方の言葉を自由に読みこなし、相互に相手方の(研究)動機や関心をもよく理解し、かくして共同研究や比較研究を積極的に遂行し、共通の主題でその力を競い合うことが望ましい、と。もちろん、この点に関しては、今日といえども事態が大いに改善されたというわけではなかろうと思われる。

ただ、一般的にいえば、1960年代以降のカナダ社会学の成長には瞠目に値するものがあることは否定し難い事実である。というのも、1960年代初頭にはカナダの大学に61人の社会学者がいただけで、その時までこの国で社会学の博士号を取得したものはわずかに2名という有様であったのが、次の20年間に社会学の学問としての地位は実に顕著に改善されたからである。すなわち、1981年にカナダの大学で社会学の博士号を授与されたものは41人、同じく修士の学位を授与されたもの

が136人にのぼった。同様に、1960年代初頭には、カールトン大学、マクマスター大学、サスカッチワン大学、モントリオール大学の四大学にしかなかった社会学部が、1981年には独立の社会学部が34、また人類学との共同学部が13と大成長を遂げたのである。社会学者の総数もほぼ600名に達しているよう。(The Canadian Encyclopedia, vol. 3 : 1725—1726)

すでに見たように、カナダ社会学については厳しい内部批判も少なしとはしないが、その進歩的な伝統と現実社会へのコミットメントは、カナダ社会学の未来への発展の基礎として今後とも重要な指針であり続けるであろう。(1986年2月13日)

参 考 文 献

- Breton, Raymond
1975 "The review and the growth of sociology and anthropology in Canada," *Canadian Review of Sociology and Anthropology* 12(1): 1-15.
- Connor, D. M. and J. E. Curtis
1970 *Sociology and Anthropology in Canada*, Montreal : Canadian Sociology and Anthropology Association.
- Clark, S. D.
1975 "Sociology in Canada : an historical overview," *Canadian Journal of Sociology* 1(2): 225-234.
1979 "The changing image of sociology in English-speaking Canada," *Canadian Journal of Sociology* 4(4): 393-403.
- Coburn, David
1970 "Sociology and sociologists in Canada : problems and prospects," In *The Future of Sociology in Canada*, edited by J. Loubser, pp. 37-59. Montreal : Canadian Sociology and Anthropology Association.
- Forces, Dennis and Stephen Richer
1975 "Social issues and sociology in Canada," In *Issues in Canadian Society : An Introduction to Sociology*, edited by Dennis Forces and Stephen Richer, pp. 449-466. Scarborough : Prentice-Hall.
- Harrison, D.
1981 *The Limit of Liberalism : the Making of Canadian Sociology*, Montreal : Black Rose Books.
- Hiller, H. H.
1979 "The Canadian sociology movement : analysis and assessment," *Canadian Journal of Sociology* 4(2) : 125-150.
- Loubser, Jan, ed.
1970 *The Future of Sociology in Canada*, Montreal : Canadian Sociology and Anthropology Association.
- Rocher, Guy
1970 "L'Avenir de la sociologie au Canada," In *The Future of Sociology in Canada*, edited by J. Loubser, pp. 14-29. Montreal : Canadian Sociology and Anthropology Association.
Extrait de la revue, *Recherches Sociographiques*, Vol. XV, # 2-3 1975 *La Sociologie au Québec*. Québec : Les Presses de l'Université Laval.